鹿児島県における寺院建立の開始と広がり

池畑耕一

一　はじめに

『日本書紀』の持統天皇六年（六九二）の条に『筑紫大宰率河内王等に詔して曰く、「沙門を大隅と阿多とに遣わして、仏教を伝うべし。また、大唐の大使郭務悰が御近江大津宮天皇のために造れる阿弥陀像を上送せよ」とのたまう』という記事がある。また、天平八年（七三六）の『薩摩国正税帳』には、正月十四日には十一人の僧侶が金光明経などの経典を読むことが、薩摩国の公式行事として行われていたという記事がある。同じころ『筑後国正税帳』では多禰嶋僧二人に食稲が支給されている。畿内か大宰府周辺で修業し、得度して種子島に帰る僧侶たちのようである。[一]

このように文献でみると鹿児島には七世紀の終りごろに仏教が伝わり、八世紀前半には国の公式行事として定着したらしいことが推測できるが、考古資料では今のところ確認できない。八世紀前半ごろの白鳳瓦が出土した例は現在のところ全くなく、仏教文化の伝来とともに広まったと思われる火葬風習実施の事実を物語る蔵骨器の出土もない。[二]

考古資料を見るかぎり、最も早い仏教文化伝来を示す資料は、薩摩・大隅の両国分寺である。これがいつできたのかを具体的に示す文献はない。『続日本紀』の天平勝宝八年（七五六）の条には全国二十六国分寺に仏事荘厳具が下賜されたという記事があるが、九州にある九国分寺のうち筑前・薩摩・大隅の三国分寺はその名が見当らない。筑前国分寺の場合は既にそれ以前に下賜されていたことが推測されており、薩摩・大隅両国分寺はまだこのころには完成していなかったと考えられている。ところが、弘仁十一年（八二〇）の『弘仁式』主税の項には、肥後国が薩摩国国分寺料として二万束を、日向国が大隅国国分寺料として二万束を供出したことが記されており、そのころには薩摩・大隅の両国分寺が完成していたことが推測できる。[三]そのあと鹿児島県での寺院建立はどのように進んでいったかを薩摩国分寺を中心に考えてみたい。

二　薩摩国分寺の伽藍配置

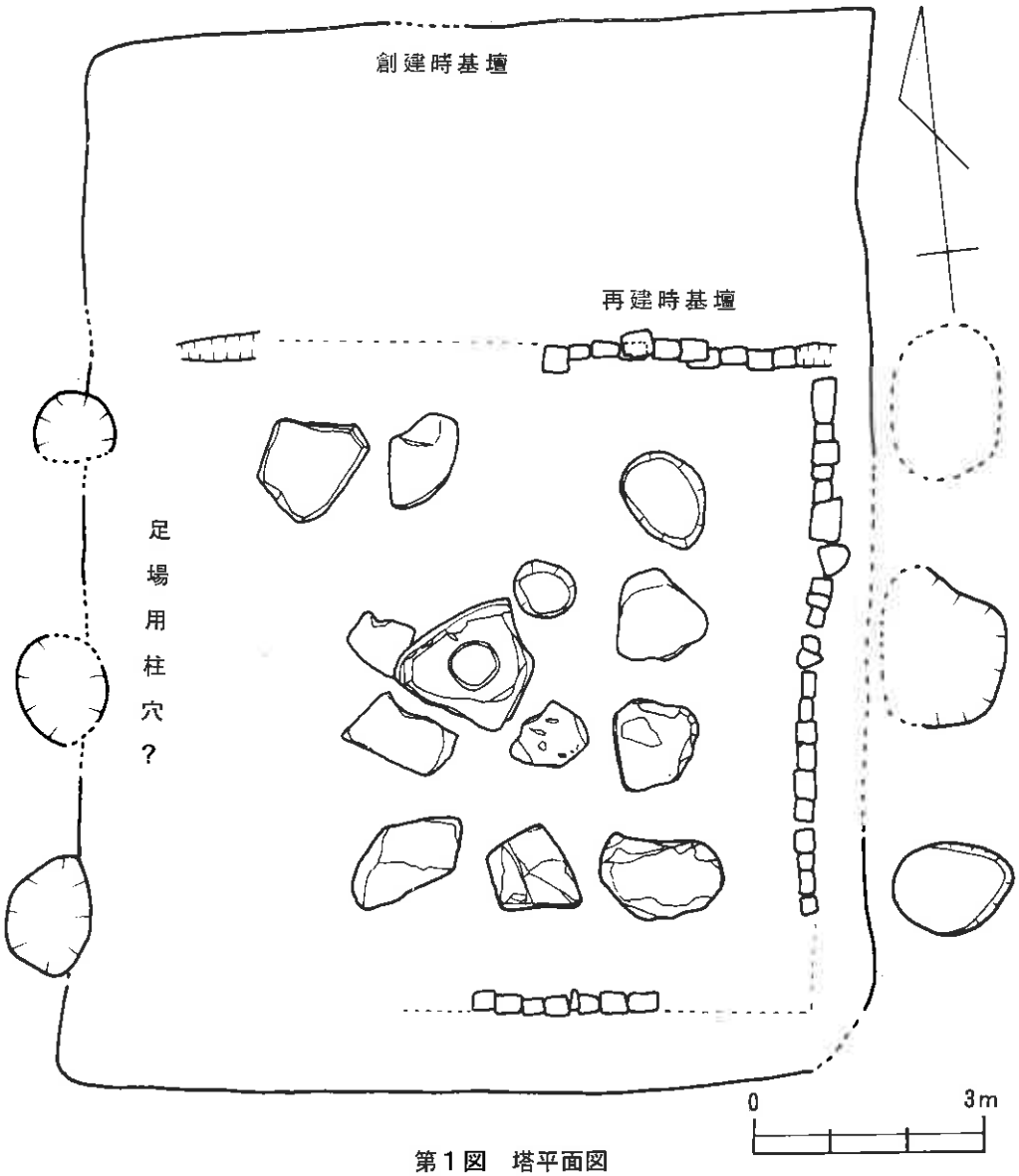
昭和四十三年以来、八次にわたって行われた発掘調査によって、薩摩国分寺の全容がほとんどわかってきた。伽藍配置について、当初の報告書（一九七五年）では、塔と対面する建物が未調査だったこと、回廊が金堂・講堂にまったく取付いていなかったことから、「金堂・塔と金堂・講堂の間をそれぞれ通って金堂とその北西遺構を囲いこむ」と記されたような伽藍配置が考えられた。[四]ところが、昭和五十五年に塔と対面する西側に礎石建物が発見されたこと、また中門想定地に回廊の付いた建物が検出されたことから、この伽藍配置は奈良県川原寺跡と同様の伽藍配

置が考えられ、[五] 公園にはそれに近い形で復元され、川内市歴史資料館には模型が展示されている。

しかし、これら個々の建物を検討してみると、新旧関係や組み合わせなどいろいろの問題点があることに気づく。筆者は既に昭和六十三年に、これらを創建時と再建時とに分けてその配置を考え、[六] さらに当館の特別展においても同様の時期設定、建物配置を考えた。[七] これらについては、その掲載誌の性格上、内容について詳しく記すことができなかったため、今回その詳細について具体的に記してみたい。

（一）塔跡の建物について

塔跡の建物は現在、切石積基壇のものが復元されているが、この他にこれより一回り広い範囲の掘り方事業が確認されている。これは切石積基壇に比べると北側で四・四m、東側で〇・五m、南側で一m、西側で〇・八m（推定）外にある。このように大きさの違う掘り方事業をして、その一部、それ



第１図　塔平面図

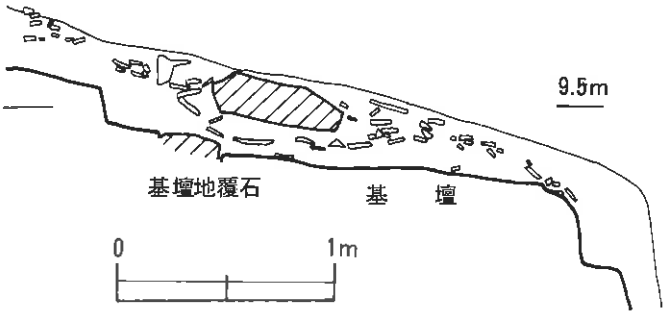
も中央部にあるならまだしも南側に寄せて建物を造営することがありうるだろうか。それは考えにくい。したがって、これは時期の異なる建物の事業と思われる。

①創建時の掘り方事業

南北方向に十三m、東西方向に十mある長方形をした事業で、現在では周辺をかなり削られ残りは良くないが、なんとか輪郭はつかめる。洪積世の砂礫層まで掘り下げ、中心軸は真北から東へ三度振れている。残りの良いところでは二十三～二十五層にわたって角礫や小礫・砂の混在する層、黒褐色粘質土、暗褐色粘質土などの層が交互に版築されている。現在の礎石はさらにその上に版築されない土を四十～五十cmほどのせており、再建時に上面を削っていないとすれば創建時基壇の厚さは約二mある。なお確認された礎石群の約〇・五m下で、西寄りに礎石が一個あり、創建時の礎石のひとつかとも推測されたが、報告書によると、これは当時の位置を動いているとされている。再建時の礎石群を動かしていないため、創建時の建物配置は不明で、周辺の削平のため基壇化粧なども不明である。

②再建時の建物

再建時の基壇は創建時の基壇より小規模となり、西側がつかめないため断定はし難いが、一辺八・六mの正方形を呈しているものと思われる。中心軸は真北から東へ四度振れている。基壇化粧は凝灰岩をていねいに磨いた塼状の切石積基壇である。最もよく残っている所ではその高さは地覆石から羽目石・平石まで約〇・五mほどの高さになるものと思われる。なお東側では角を小さく矩形に削り取った切石が数個あることから、これは基壇化粧と直交する形で交差する階段ではないかと考えられている。最も下にある地覆石は創建時の基壇をやや掘り込む形で置かれ、外の面は基壇面を切り取ったものと思われる。また東側の階段付近では瓦をぎっしり敷きつめたような状況も伺えた。一辺が五m四方ある礎石建物で、柱間は一・六m＋一・八m＋一・六mある。



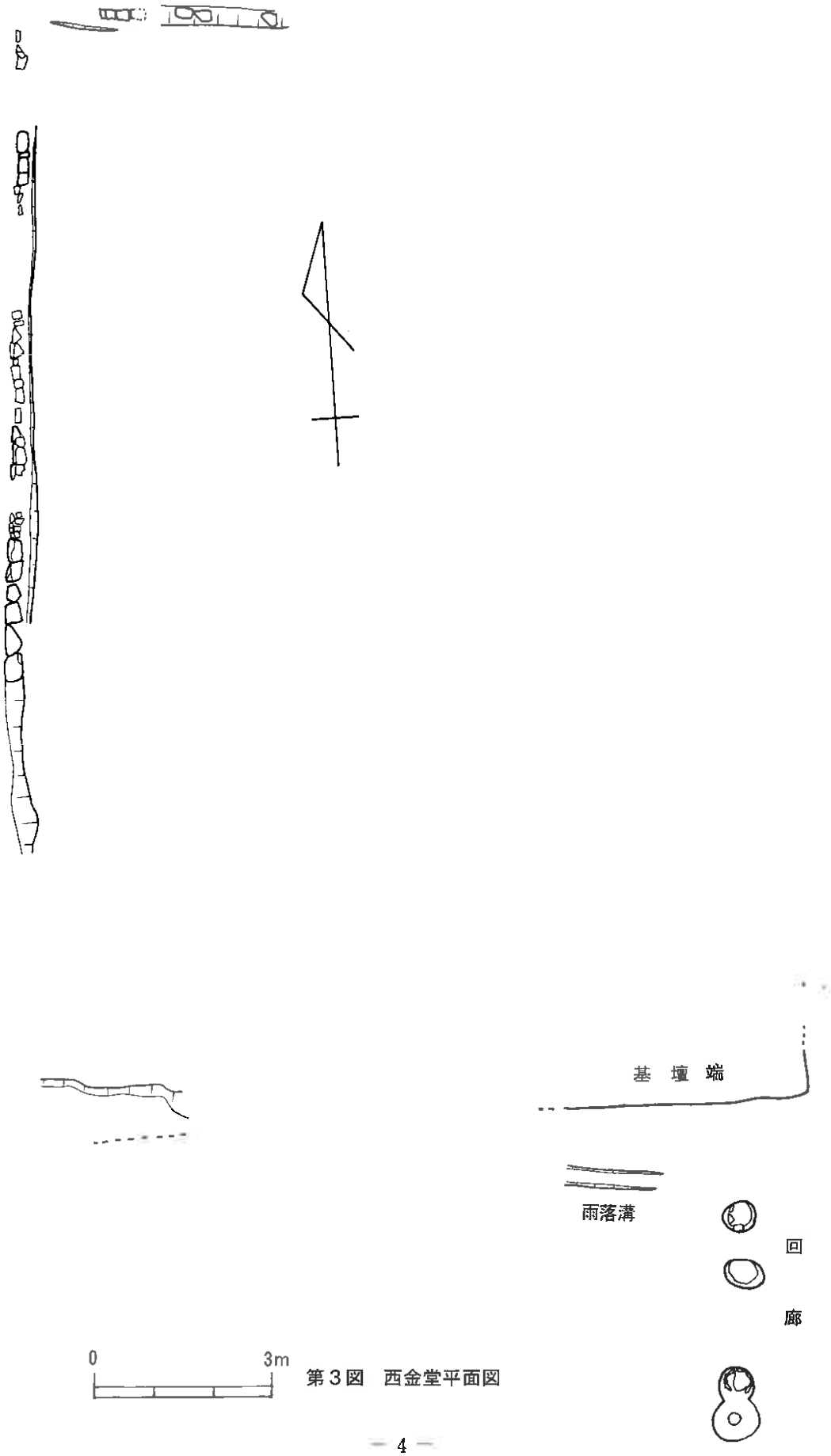
第２図　塔北側断面図

③掘り方事業を切る大型柱列

創建時の掘り方事業を掘り込んだ柱穴が、再建時の基壇の東西外側に三本ずつ確認された。それぞれの柱穴は直径が一m～一・四mあり、中には凝灰岩角礫が多量に含まれている。柱間は三・三mずつあり、東西の心心距離は約十一mある。これは再建時の基壇内にはみられず、この六本だけで成っていること、基壇化粧の切り石敷設時には撤去されていることから創建時あるいは再建時の際の足場用柱穴かと考えられている。

（二）西金堂の建物[八]について

昭和五十五年に発見された、中軸線を挟んで塔と対置する建物である。南北十八・四m、東西十三・四mある長方形の掘り方事業で、中心軸は真北から東へ三度振れている。礎石あるいは根石痕跡などが検出されないため、もともとの基壇上面はもう少し高かったことが予想できるが、



第３図　西金堂平面図

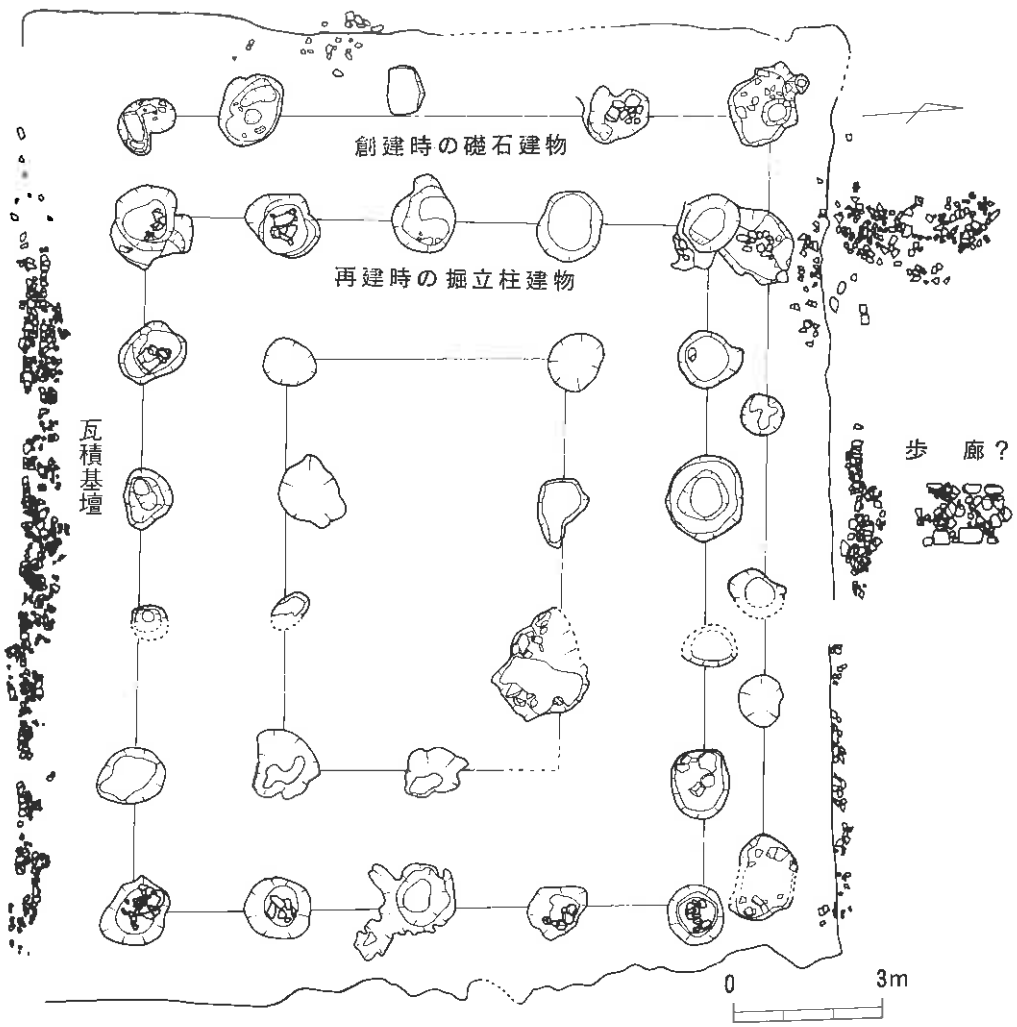
最も残りの良いところで十八層にわたって砂質土・粘質土・凝灰岩細礫などの層が版築され、その厚さは一・二m～一・四mある。西側と北側に礫積みの基壇化粧が見られるが、西側の礫の上に瓦の乗ったものがあることから瓦積み基壇かと想定されている。

（三）金堂の建物について

東側が削平を受けているため全容は不明だが、ほぼ輪郭はつかめる。掘立柱建物と礎石建物の二回にわたる建物が想定できる。掘立柱建物と礎石建物の場合、その新旧関係がよく問題にされるが、ここの場合、掘立柱建物が掘り方事業の上面から掘り込んでいること、掘立柱建物は礎石建物に比べてやや南東方向にずれているが、重複している礎石建物の南東側列が掘立柱建物の掘り方によって消滅していることなどから礎石建物の方が古いと思われる。

①創建時の建物

南北方向に十七m、東西方向に二十mある長方形をした掘り方事業であるが、中軸線からの距離で想定すれば、東端がもう少



第４図　金堂平面図

し延びるものと思われる。中心軸は真北から東へ三度振れている。深さ〇・八mにわたって砂質土・粘質土などの層が版築されている。二間×三間の礎石建物であるが、再建時の建物がほぼ同じところに建築されたことから東南部にあった礎石は根石もなくなっている。柱間は南北方向・東西方向とも三・六mの等間隔で、その四周に二・七mずつのひさしが出ている。基壇化粧は不明である。

②再建時の建物

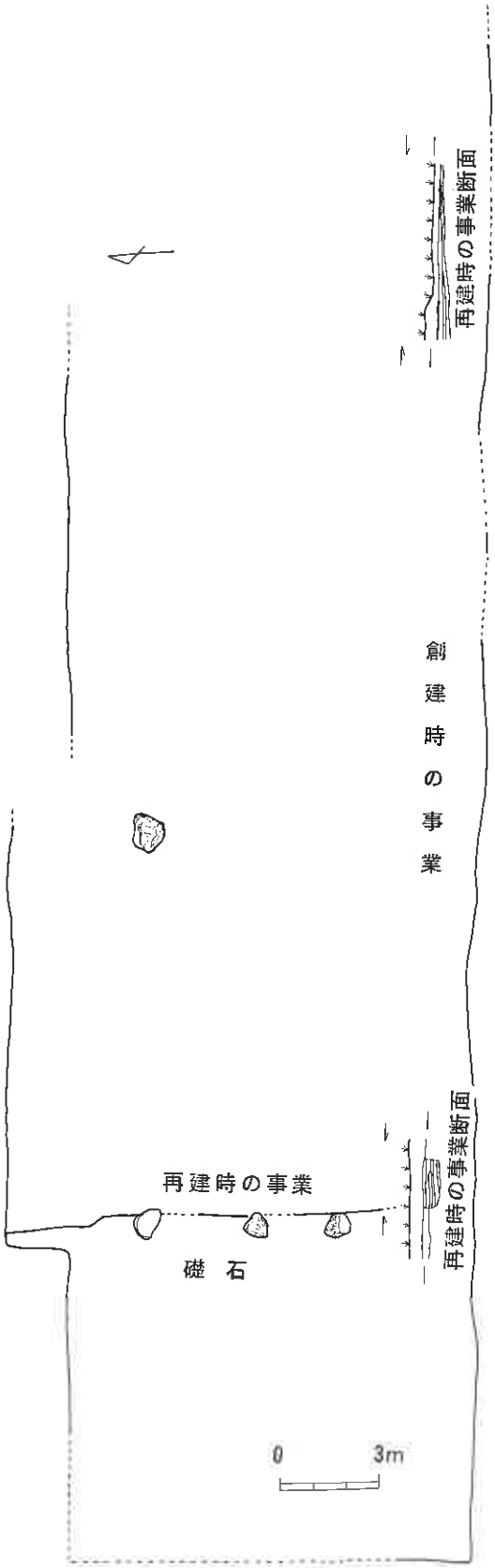
再建時の建物は瓦積み基壇で四周を囲み、創建時よりやや小規模の掘立柱建物に変わっている。基壇は南北方向が十六・八m、東西方向が十九・五mほどになり、北側には幅一・二m、長さ三m近くある歩廊と考えられるものが二列延びている。掘り方事業をぶち抜いた二間×三間の建物で、柱間は南北方向・東西方向ともに二・八mの等間隔で、その四周に二・六mずつのひさしが出ている。掘り方の最下部には扁平な凝灰岩礫が数枚ずつ敷いてある。中心軸は真北から東へ四度振っている。

（四）講堂の建物

掘り方事業が二回にわたって検出されており、二～三時期の建物が想定される。

①創建時の掘り方事業

上部がかなり削られているために、全容が把握しにくいが、南北方向が十二・六m、東西方向が四十六・五m以上の事業である。東側の端部が不明瞭であるが、中心軸から折り返すとさらに延び、東西方向は四十八mほどの事業となる。北側ラインで、西端から九・三mの所から、東



第5図　僧坊・講堂の平面図

へ十五m、北へ一・九mの突出部分がみられる。残りのよいところでも厚さは二十cmほどしかなく、一層が確認されただけである。西北隅付近では基盤層の岩盤が露出しており、これを基盤として利用している。中心軸は真北から東へ三度振れている。

②再建時の掘り方事業

創建時の事業を約三十cm掘り込んで造っており、やや小規模となる。南ライン、西ラインだけしか確認されていないが、南北方向約十一・六m、東西方向約二十七mほどの事業である。創建時の版築が小さい礫を使用しているのに対し、この事業はこぶし大、あるいは人頭大ほどの割に大きな角礫を多く用いている。中心軸は真北から東へ四度振れている。基壇化粧は、北側に人頭大の玉石が九個並んでいることから乱石積基壇であることが想定されている。

（五）金堂北西遺構

金堂の北西部に南北四間、東西五間の総柱掘立柱建物が検出されている。それぞれの柱穴は直径が一m～二m、深さが〇・七m前後ある。底には瓦や板状の凝灰岩礫が敷かれており、瓦の中には再建時のものも含まれている。柱間は南北方向が二・二五m十二・一m十二・一m十二・二五mの八・七m、東西方向が二・三七m等間隔の十一・八五mである。中心軸は真北から東へ四度振れている。

（六）伽藍配置

発見された遺構について、どのように組み合わさるかを考えてみると、大きく二時期に分かれることがわかる。すなわち、中心軸が真北から北へ三度振れたものと、四度振れたもの、礎石柱のものと、掘立柱のものとに分かれる。こうしたものを総合して創建時のものと、再建時のものとに分けることができそうである。

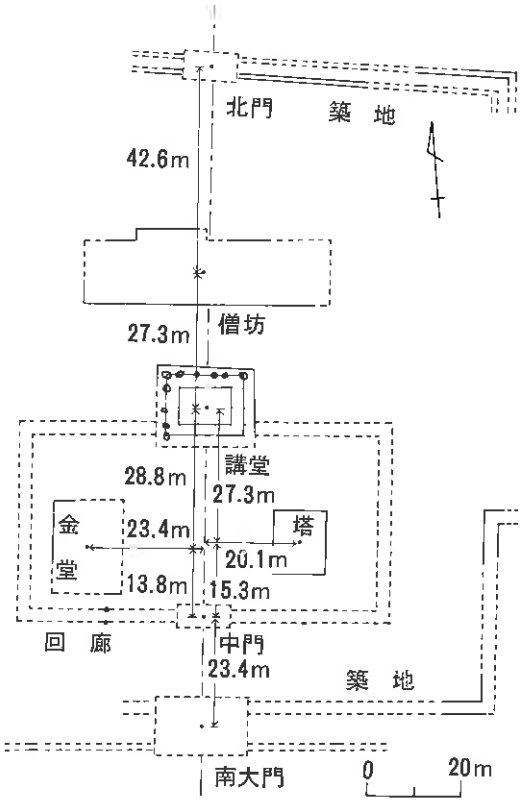
①創建時の建物配置

創建時の建物として考えられるのは、真北から北へ三度振れた建物群で、川原寺式伽藍配置として考えた時、塔・西金堂・金堂・講堂に当たる四建物である。塔・西金堂は中心軸を挟んで対面する南北方向に長い建物で、削平等によって詳細は不明であるが、同様の版築をし、基壇上面はほぼ標高（以下こういう場合標高を略す）十mであろうと思われる。中心軸と塔の心心距離は約二十m、中心軸と西金堂の心心距離は約二十三・四mある。次に、金堂は南面しているが、この中心と塔の中心との南北距離は二十七・三m、西金堂とは二十八・八mある。さらに講堂と金堂の南北の心心距離は二十七・三mある。また想定位置ではあるが、北門と講堂との心心距離は四十二・六m、金堂と中門との心心距離は四十二・六m、中門と南大門の心心距離は二十三・四mとなる。こうしてみると、それぞれの心心距離は規則正しい比になっていることに気付く。それぞれの共通数字を求めると約三十cmとなり、それを一尺とした整然とした設計のもとでこれらの建物が造られたことが予想できる。

さて、こうした時、これらの建物配置は川原寺式といえるであろうか。報告書で講堂といわれている建物は、東端および西北隅がはっきりしていないが、西南隅が確認されており、北側線・南側線が直線になっていることなどから残存度が悪いもののこれは掘り方事業の底部と思われる。それは旧地形を考えてみるとよくわかる。北端溝の肩面高は約十一m、金堂の基壇面は十・五mである。北端溝の肩面はもう少し高い可能

第６図　金堂北西遺構平面図

性があるが、それにしても北から南に向かってゆるやかに下降していることがわかる。さらにこの建物の北側は段差七十cmの土手になっており、畑あるいは住宅建築の際に削平された可能性がある。金堂の基壇よりは低かったとしても相当の高さが削平されているようである。とすれば、この建物は東西の長さが約四十八mある細長い建物となり、これは講堂というより僧坊と考えた方がいいように思える。こう考えた場合、講堂は従来金堂と呼ばれていた建物、さらに金堂は従来西金堂と呼ばれていた建物がふさわしい。すなわち塔と金堂が東西に対面し、その北側に講堂・僧坊と並ぶ伽藍配置が考えられる。このような伽藍配置は川原寺亜式とも呼ばれる観世音寺式伽藍配置である。これは陳内（じんない）廃寺（城南町）など熊本県のいくつかでも想定されており[九]、当初、肥後の援助を受けた



第７図　創建時の伽藍配置

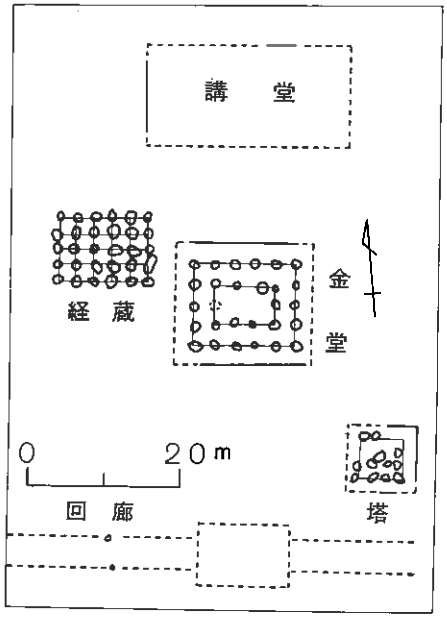
という建立事情からしても考えやすいことである。中門の想定位置は、かつて近くの池改修時に土を持ち出したとの付近の人びとの証言でも想定できるように、深く削りとられている。そのため、その掘り方事業を確認することは不可能だが、これに取り付いていたと思われる回廊の柱穴が、ここでいう金堂の南で発見された。それは柱間が約三・六ｍあり、北側の柱と南側の柱は間隔は二・四ｍある（第３図）。これらは二組あり、創建時と再建時との違いだと思われるが、柱の切り合い関係、先の設計および真北と中心軸の角度からして南側のものが創建時のものと思われる。北端にある二本の溝は底から少し上に創建時の瓦や、八世紀末～九世紀前半の須恵器、土師器などが堆積していることから創建時のものと思われ、南東端で見つかった溝も同時期のものであろう。

②再建時の伽藍配置

建物の建て替えがいつ、あるいはどのような理由で行われたかといった点は後で記すが、再建時のものと思われる建物は創建時の建物を除いた建物群であろう。そうすれば創建時の金堂跡には二次的建物の跡が検出されていないことと、僧坊跡の建物の東西距離が短くなっていることなどから、金堂と講堂が南北に並ぶ建物配置を考えることができよう。さらに金堂と同じような構造をもつ北西の建物は同時期のものと思える。それは、この建物が北西部に設計されたことによって金堂が創建時の建物配置より東南方向に移動せざるをえなかったこととも軌を一にする。そのことが中心軸を創建時より一度東へ振らざるを得なかったことにもなる。それは建物の東南隅が台地端いっぱいにきていたという立地条件からして、端を東へも南へも移動できなかったという理由からきている。

金堂の北西にある建物は総柱であることから倉庫としての建物が想定できる。他の寺院の伽藍配置例からして金堂の北西部にある建物は経蔵である可能性が強く、これも倉庫であることから経蔵と断定してよかろう。

再建時の伽藍配置は第８図のようになるが、これは大官大寺式の配置をしており、九州内では筑前国分寺の配置が同じである。薩摩国分寺は『旧記雑録』によれば[十]応和年間（九六一～九六三）に筑前安楽寺領になったと伝えられており、こうした伽藍配置の変化もその影響があったのであろうか。南大門・中門は検出できなかったが、中門から西へ延びた回廊の跡は、創建時の回廊跡と隣接して発見された一対のものがそれであろうと思われる。これはまわりを丸瓦や平瓦の大きな破片で根固めしてあり、柱間が三・六ｍある。南側の柱と北側の柱の間隔は二・七ｍある。北側溝は新たに掘られた様子がみられないことから創建時のものがそのまま使われたか、築地に代わる簡単な施設があったかが考えられる。しかし、創建時の瓦は、土がかなり埋まってからのちに埋没していることから想定すれば、この溝はあまり長期にわたって使われたと



第８図　再建時の伽藍配置

は考えられない。寺地の地形からみて、溝が傾斜面の途中にあることからしても埋没は早かったものと思われる。ただ南側では幅三十cmの二列の瓦列が発見されている。これはほぼ東西方向に二・七mの距離を置いて並行に走っており、中にはいっている瓦からして再建時の築地とも考えられる。外からよく見える南側だけはきちんと築地をつくったのだろうか。

（七）出土瓦の分類

国分寺跡からは多くの瓦が出土しているが、報告書ではそれらを軒丸瓦八種、軒平瓦九種に分けている。これらをさらにa・bの二種類に細分したものもある。

①軒丸瓦

軒丸瓦のⅠ式は複弁蓮華文で、二重輪郭で囲まれた八葉のうち一葉は単弁になっている。中房は一＋八の蓮子配置をもち、一段低い。外区には二十三個の珠文がめぐっている。これは笵が完全なものと、ひび割れが生じたものの二種に分けられ、さらにそれぞれ周縁帯のあるものと、ないものとがある。周縁帯のあるものは直径が十八～十九cm、ないものは直径が十四cmである。

Ⅱ式は複弁八葉蓮華文で中房が一＋五、外区に円圏を伴った十七個の珠文をめぐらし、低い素文縁が外周に付されている。各複弁の間の界線がないという特徴をもっている。

Ⅲ式は細線で狭長な細弁二十七葉を表現した内区と十三個の珠文を巡らした外区で構成され、周縁は突出した素文縁が巡っている。中房蓮子は一＋六の配置である。

Ⅳ式は凹んだ単弁形式で、周縁は突出した素文縁のものである。a類とb類に分かれる。a類は九葉単弁で、外区に八個の珠文を巡らし、中房の蓮子配置は一＋五である。b類は十二葉単弁で中房は中央に大型珠文一個があり、そのまわりに四つの粒状珠文のあるもので、外区の珠文は省略されている。

Ⅴ式は頭部を珠文化した相対向する流雲文四組を内区に、棒状化した珠文十九個を外区に巡らしたもので、中房の蓮子配置は一＋八である。

Ⅵ式は菊花状の細弁形式蓮華文を主文とし、外区には周縁からのびた珠文が巡り、周縁は無文である。

Ⅶ式はハート形の素弁八葉蓮華文で、その外に花を伴う流麗な扁行唐草文がまわる。外区には四十四個の珠文が、さらにそのまわりに素文縁がある。中房の蓮子配置は一＋六である。瓦当面は皿状に凹んでいる。

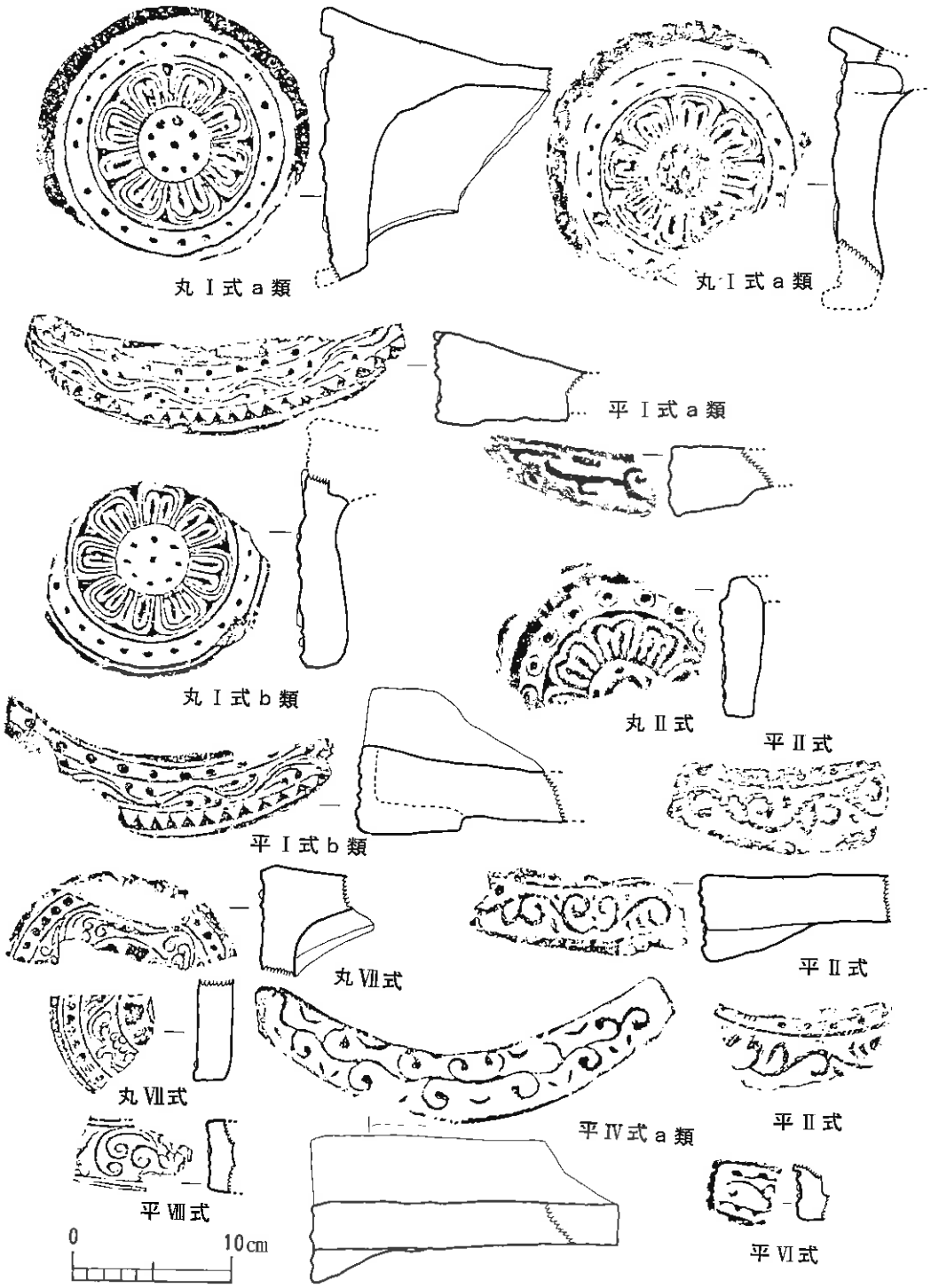
Ⅷ式は幅広い周縁帯の内側に簡略化された唐草文帯がまわっている。

②軒平瓦

軒平瓦のⅠ式は中心飾がないものの、左右対称に尾部が流れる変形扁行唐草文である。上縁は珠文帯、下縁は内行する陽起鋸歯文帯である。断面は有段の深顎、中顎形式で、顎の深さによって七～九cmのa類と、七cm以下のb類に分かれる。これらのほとんどは陽起鋸歯文が左右までまわらないが、破片の中にはまわっているものもある。

Ⅱ式は中心飾に渦文をすえて交互に反転しながら左右にのびる均正唐草文で、上縁は珠文帯、下縁は素文帯である。断面は中顎形式である。

Ⅲ式a類は斜格子文を主文とする。中央に縦線と二個ずつの縦長珠文があって左右に分け、周縁は四周に三十七個の珠文が巡っている。Ⅲ式


丸Ⅰ式a類
丸Ⅰ式a類
平Ⅰ式a類
丸Ⅰ式b類
丸Ⅱ式
平Ⅱ式
平Ⅰ式b類
丸Ⅶ式
平Ⅱ式
丸Ⅶ式
平Ⅳ式a類
平Ⅱ式
平Ⅷ式
平Ⅵ式
0
10cm

第9図　創建時の軒先瓦

b類も斜格子文が主文だが周縁の珠文がなく、斜格子文の上下周縁近くに横線を加えて、周縁を形成している。両端近くの二格子内に珠文を加えている。

Ⅳ式は周縁が無文の均正唐草文で、つる草の表現によってa・bの二類に分けている。

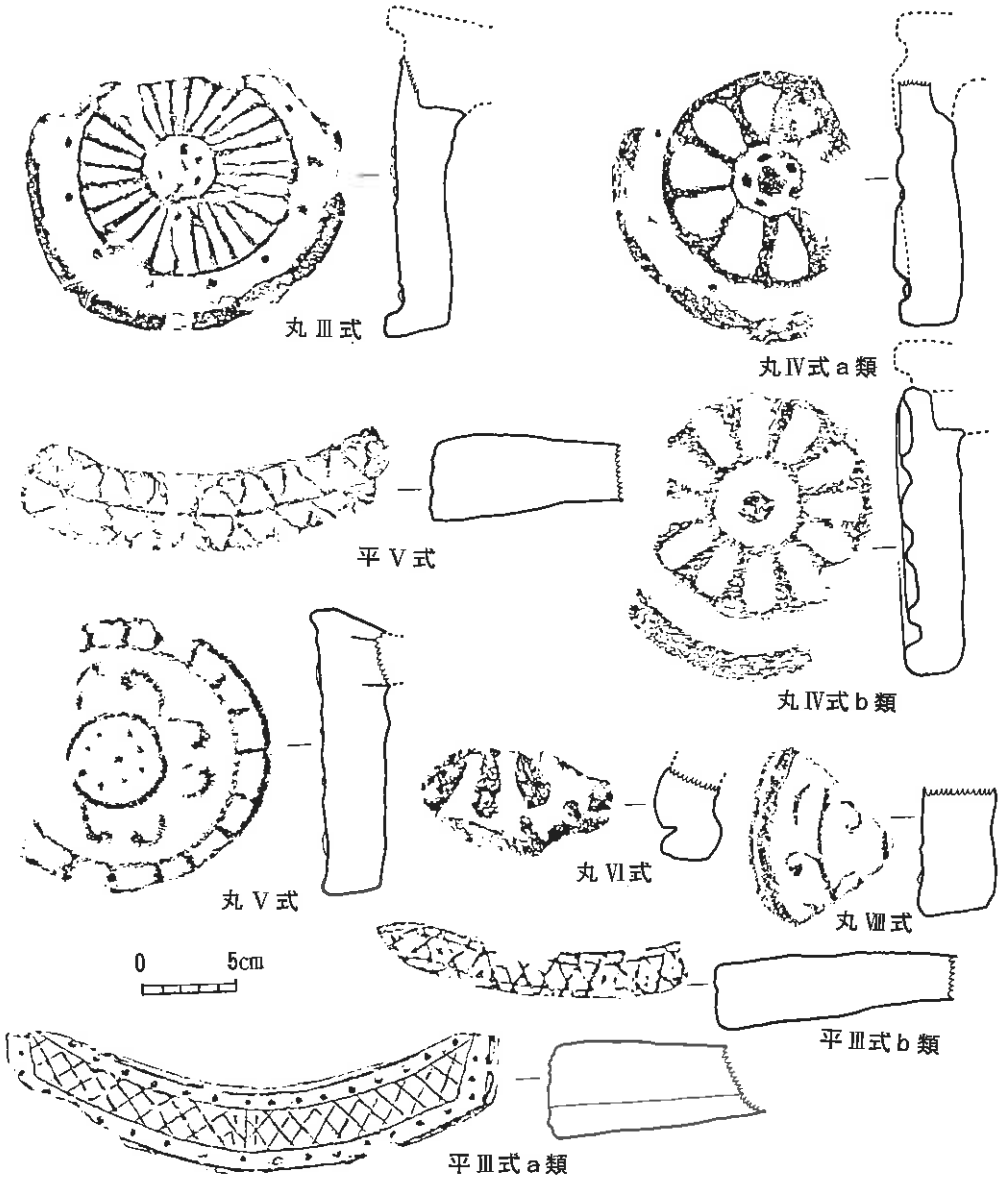
Ⅴ式は瓦当面を横線で上下二段に分け、両方から相対する内向鋸歯文を並列したものである。

Ⅵ式は唐草文を主文様とし、上縁が珠文、下縁が外向陽起鋸歯文となるものだが、小ぶりで文様も退化している。

Ⅶ式は平板な瓦当面に格子文を叩きつけたものである。

Ⅷ式は細い唐草文を主文様とし、左右に反転しながらのびるつる草のつけ根には花文やつぼみが加えられている。

Ⅸ式は瓦当面が無文のものである。



第10図　再建時の軒先瓦

創建時の軒丸瓦・軒平瓦はⅠ式であることが文様・出土量からして想定できるが、このⅠ式はさらにa類とb類の二種に分かれている。これらは瓦笵はいっしょでありながら、その大きさが違う。すなわち軒丸瓦は周縁部の幅が広いものと狭いもの、軒平瓦は側縁まで鋸歯文のまわるものと、切れるものである。これらは表でみられるようにどの建物に集中するということはなく、全体的に広がっていることから建物によって異なっているのではなく、時期差を示している可能性が強い。そのことはまた後で触れることにする。

鬼　瓦　1～3：創建時，4：再建時，1は鶴峯1号窯出土

Ⅰ式に次いで出土数が多いのは軒丸瓦Ⅲ式と軒平瓦Ⅴ式である。これらはその文様構成もよく似ており、再建時の軒先瓦である可能性が強い。この段階になると軒丸瓦は蓮華文が完全に退化し、ただ細線で細弁を表現している。軒平瓦も唐草文がみられず、上下二段に分かれた鋸歯文となっている。

さて軒丸瓦と軒平瓦を文様からみると大きく二種に分けられることがわかる。つまり軒丸瓦は蓮華文のはっきりしたものと、蓮華文が退化し線やくぼみで表現したものの二種である。前者に該当するものがⅠ・Ⅱ・Ⅶ式、後者に該当するものがⅢ・Ⅳ・Ⅵ式で、Ⅴ式・Ⅷ式はその中間型式である。軒平瓦は唐草文を主文様とするものと、鋸歯文・格子文を主文様にするものとがある。前者に該当するのはⅠ・Ⅱ・Ⅳ・Ⅵ・Ⅷ式で、後者に該当するのがⅢ・Ⅴ・Ⅶ式である。これらはそれぞれ蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦が創建時の軒先瓦、およびその差し替え瓦、退化した文様をもつ軒丸瓦・軒平瓦が再建時の軒先瓦、およびその差し替え瓦と思われる。なお、ここでは詳しく記さなかったが、鬼瓦についても同様のことがいえる。つまり、頭に半円形のえぐりのある都府楼系の鬼瓦の系統が創建時の瓦、およびその差し替え瓦で、頭にえぐりがなくなり、眼球が突出したり個性的な姿をしたものが再建時の瓦である。これらの出土位置は表のとおりである。

（八）再建時期はいつか

これまで建物配置・軒先瓦の分析から創建・再建時の国分寺をみてき

瓦の分類 ＼ 建物	創建時									再建時								
	軒丸瓦			軒平瓦						軒丸瓦					軒平瓦			
	Ⅰ a	Ⅰ b	Ⅶ	Ⅰ a	Ⅰ b	Ⅱ	Ⅳ a	Ⅳ b	Ⅷ	Ⅲ	Ⅳ a	Ⅳ b	Ⅴ	Ⅵ	Ⅴ	Ⅲ a	Ⅲ b	Ⅸ
塔	50		2	23		0	1		1	5	1		1	1	8	0		3
西金堂	5	0	1	2		1	5	0	0	0	0		0	0	1	0		0
金堂	6		1	1		0	2		0	0	0		0	0	2	0		0
講堂	8	7	1	5	6	1	0	2	0	4	2	2	2	0	7	1	0	0
経蔵	6	1	0	3	4	1	4	0	0	1	0	1	0	0	1	0		0
北溝	5	2	0	2		0	2	0	0	1	0		0	0	0	0		0

たが、この二時期には大きな変化があったことが想定できる。それはいつの時期だったのであろうか。

ひとつの手がかりは瓦の変化である。蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦の差し替え最終時期はいつかということである。軒丸瓦Ⅶ式と軒平瓦Ⅷ式は文様形態が類似していること、東方向約三kmにある天辰廃寺からセットで出土していることなどから考えるとセット関係になることが予想できる。小田富士雄氏はこれらの瓦を創建時末ごろの補修瓦と考え、十世紀代と考えている。(十一)

あとひとつはこうした大がかりな改築工事をした原因である。建物の破損原因として老朽化、火災、洪水、地震、台風等が考えられる。まず老朽化という点では八世紀末の創建としたとき、百五十年ほどの年代が経っていることになるが、このような年代では部分的な改築で間にあいそうな気がする。ということは、なんらかの災害にあった可能性がある。広い範囲の調査によっても火災の痕跡は発見することができなかった。したがって、大規模な火災があった可能性はまずないと考えてよいのではなかろうか。洪水の可能性も川内川は荒れ川で知られており、現在の川内市街地は現代でも数回の大洪水に見舞われていることから考えられないこともないが、そうした場合もこの国分寺台地までは被害が及んでおらず、その地形からして可能性は少ない。地震については、近くに開聞岳という活火山をひかえている指宿市の、橋牟礼川遺跡や中島ノ下遺跡などでは近年その跡が見出されているが、国分寺ではすべてが倒れたといえるほどの痕跡を見出すことはできなかった。(十二)

あとひとつが台風である。台風銀座と呼ばれる南九州には多くの台風が上陸しており、その被害もまた多い。塔の高さを七重でなく五重だと考える人も、その要因としては台風を考えている。『続日本紀』によれば、天平神護二年（七六六）六月三日・宝亀六年（七七五）には南九州を台風が襲い、その被害が大きかったため納税を免除したという記事がある。(十三) 当時、台風によって寺院の倒れた例は九州だけでない。永祚元年（九八九）に近畿地方を襲った台風は奈良盆地の山田寺・坂田寺、東大寺の南大門などを倒した。(十四) 一九八五年に発見された山田寺の東面回廊もこの時に倒れたものと想定されている。この再建をせねばならなかった原因は断定できないが、台風だった可能性が大きいのではなかろうか。

なお、あとひとつ薩摩国分寺で注意せねばならないのが、北側の築地溝から出土した多くの完形瓦である。これは先の軒先瓦の分類では軒丸瓦Ⅰ式中の周縁帯が広いもの、軒平瓦Ⅰ式a類に相当するほどの大きさをもつ平瓦である。その数は標準サイズのものに比べて少なく、ある時

期に作られなくなった可能性がある。重量を計れば巨大な平瓦が十二kgなのに対し、標準サイズの平瓦は五kgしかないことから、総重量からすれば大変な違いである。ある時期、これらの瓦がなんらかの理由で放棄されたようである。その時期はいっしょに出土した須恵器からみて九世紀前半ごろであるから、再建時よりだいぶ早い時期であり、例えば創建時の建物がすべて揃わないころであったことが予想される。こうしたことが起こるきっかけもまた台風などの大風であったことが考えられるのであり、他地域では考えられなかった気象条件が瓦博士、つまり今でいう建築技師の考えを狂わせたのではなかろうか。

（九）その後の建物はどうなったか

薩摩国分寺跡出土の瓦は古代の物だけで、中世に降るものはない。この地にいつごろまで建物があったか定かでないが、天正十五年（一五八七）豊臣秀吉の島津征討では泰平寺の周辺に火をかけ、この時、国分寺と天満宮も焼失し、遂に廃寺となったと伝えられる。その後、寛文九年（一六六九）には再建されているが、その地は明治二年（一八六九）の廃仏毀釈まで寺のあった天満宮参道の東側だったようだ。

さて再建時の建物が廃絶したのは平安時代後半であったが、その後の約四百年間は瓦の使われない建物だったのだろう。それがどのような建物だったのか定かでないが、中門地区で発見された南北三間（三m＋三m＋三m）、東西二間（三m＋三m）で四面にひさしの出ている掘立柱建物は、根石のないことなどからこの時期の建物であった可能性がある。この建物の南側には回廊が付いており、この建物の性格はいわゆる本堂みたいなものだったのではなかろうか。この本堂を中心にしてまわりに小規模な建物があったのだろう。北築地の外側には数棟の建物と井戸、多くの柱穴が見つかっており、これらの中にもこうした時期のものがはいっているかもしれない。

三　川内周辺の瓦を出す寺

薩摩国分寺が建立されてからも薩摩国では古代瓦の出土する遺跡は多くない。現在のところ確認されているのは国府周辺のみで、三か所を数えるのみである。次にそれぞれを紹介したい。

（一）天辰廃寺

国分寺跡の東方約三km、川内川を越えた通称寺山と呼ばれる上床山の中腹にある。前面に小さな渓流がある狭小な台地上から布目瓦が出ている。ここから出土している軒丸瓦は小さな八葉宝相華文のまわりに唐草文、さらに珠文がまわる。国分寺の軒丸瓦Ⅶ式と同笵瓦で、軒平瓦は扁行唐草文の上縁と下縁に珠文のある国分寺の軒平瓦Ⅷ式と同笵の瓦である。この遺跡は天辰（尼達）という地名からして薩摩国分尼寺に比定する説もあるが、創建が遅くて短期で終っていること、立地の点からみて正式な建物配置が困難なこと、僧寺が高城（たき）郡であるのに対し、ここは薩摩郡であることなどからして尼寺に比定することは無理と思われる。

なお、これまでこの地は寺跡として考えられていたが、狭すぎる平坦地、基盤が岩盤で土が薄いことなどからして、寺跡としてだけではなく薩摩国分寺の瓦窯として考えることはできないかと筆者は考えている。傾斜面に立地していること、水が豊富なこと、さらに一時期のセット関係しか見出せないことなどからして、今後一考を要する地ではないかと思われる。

（二）弥勒寺跡

新田神社一の鳥居付近から、平板化した軒丸瓦が発見されている。主文様は簡略化された素弁十二葉蓮華文である。主文様と中房あるいは外区との間には一本の圏線があり、外区には十四個の珠文がある。周縁は圏線がまわる。一の鳥居付近から新田神社にかけての参道の左右には江戸時代にいくつかの寺院があり、この瓦はその前身的性格をもった寺院のものであろう。時期は十一～十二世紀ころかと思われる。

（三）泰平寺跡

弥勒寺（右）と泰平寺（左）の軒丸瓦

国分寺跡の南西七百五十mの微高地上にあり、周囲の東西二町、南北一・五町に深い濠を巡らしている。開基は和銅元年（七〇八）と伝えられているが、出土している軒丸瓦は泰平寺（たいへいじ）と陽刻され、その周辺を二十八個の珠文が囲んだものである。周縁帯は幅広い。これは十二～十三世紀ころのものと思われる。

四　薩摩国の他の古代寺院

薩摩国では上記四寺のほかには布目瓦を出す寺がない。[十五]では瓦葺き寺院以外の寺はなかったかといえばそうとばかりはいえない。

（一）伝承による古代寺院

古代あるいはそれ以前の創建と伝えられる寺がある。例えば鹿児島市慈眼寺、同清泉寺、坊津町一乗院龍厳寺などは日羅が六世紀後半に建てたといわれており、串木野市頂峯院は蘇我馬子が建てた興隆寺に始まると伝えられている。七世紀後半に建てられたと伝えられているのが指宿市光明寺で、八世紀前半の創建とされるものに川内市九品（くほん）寺がある。これらは将来発掘調査で確認されない限り、その存在すら疑わしいが、少なくとも瓦葺きでないことは確かである。

いっぽう川内市中福良町にある平礼石（ひられいし）（避石）寺は文献によって平安時代にはその存在が想定できる寺である。建仁三年（一二〇三）の薩摩郡司平忠直譲状には「（略）雖為古寺、故忠永朝臣之時、令修造（以下略）」という記事があり、[十六]忠直の父忠永がすでに存在していた古い寺を修理したといっている。十三世紀初めに改築せねばならないほどの古い寺があったことを示している。しかし、これもまた茅葺きであったようである。こうした郡家と郡寺について筆者は既に熊本の例を挙げて可能性を示唆

したことがあるが、(十七)これまでのところ平礼石寺以外確認されていない。

五　大隅国分寺

大隅国分寺は国分市街地の北部にある城山の麓にあることが予想されており、図書館の隣接地には康治元年（一一四二）銘の石造多層塔や石像などが並べられている。瓦は広い範囲に分布しているが、中世から近世にかけて城下町となったこと、現在市街地化が進んでいることから調査は進んでいない。ただ県や市教育委員会によって数回の調査がされて瓦の集中した場所や溝などが発見されており、この一帯にその存在が予想できる。

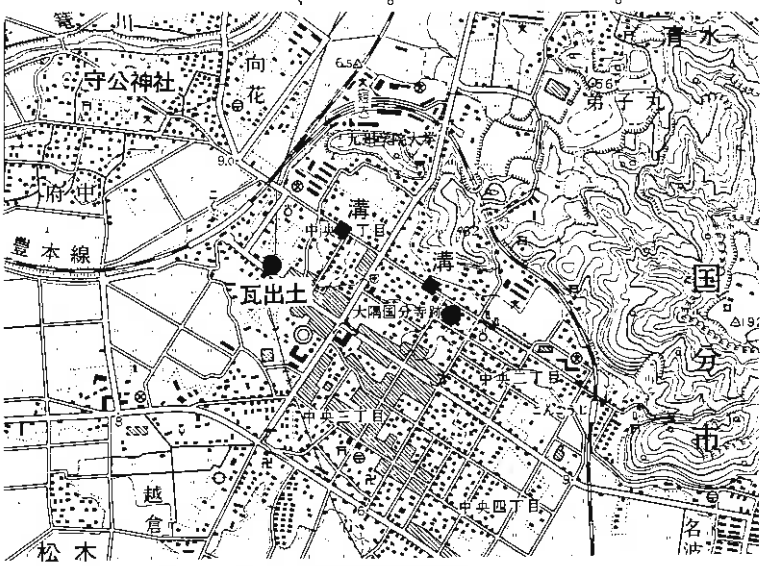
ここから発見されている軒先瓦は軒丸瓦が三種、軒平瓦が三種ある。

軒丸瓦は第一式が間弁のある複弁六葉蓮華文で、外区に二本の圏線に挟まれた珠文が十六個まわっている。周縁は無文帯で、中房がややへこんでおり、蓮子は一＋四＋八である。二式は間弁のない複弁八葉蓮華文で外区を二本の圏線に挟まれた珠文が十六個まわっている。周縁は無文帯で、中房はやや突出し、蓮子は一＋八である。三式は素弁十一葉蓮華文で外区は二本の圏線が巡っているが、その間に珠文があるのかどうかはっきりしない。周縁は無文帯で、中房は内区との境に圏線があり、蓮子は一＋五である。

軒平瓦の一式は無顎の扁行唐草文で上下左右に小粒の珠文を配している。瓦当幅の広いものと狭いものがあり、a類・b類に分ける必要がある。二式も無顎の扁行唐草文であるが、一式に比べて線が太く扁平となる。上下には太い珠文が配されている。これらの軒先瓦は薩摩国分寺跡のものに比べると、やや小ぶりで、軒平瓦が無顎であることから時期がいくらか下るものと思われる。

尼寺の位置はこれまで守公神社付近に想定する見解があるが、確証はされていない。ところが平成元年、僧寺の西方約四百mの地で、市道拡張に伴う調査が市教育委員会によってなされ、僧寺と同じような溝が検出された。向きや規模、僧寺との位置関係、距離などからして今後尼寺跡の想定地として検討せねばならない場所と思われる。なお国分駅東方一帯からも軒先瓦などが数点発見されている。

軒丸瓦はくぼんだ単弁五葉蓮華文で、そのまわりをくぼんだ珠文四十四個が巡っている。さらにそのまわりに唐草文が配され、周縁帯ははっきりしない。直径が十七・五cmあり、中房は中心に大きな蓮子があり、そのまわりに十二個の



第１１図　大隅国分寺跡周辺

小さな蓮子がある。このように蓮華文のまわりに唐草文を巡らす軒丸瓦はもともと白鳳時代の天台寺・垂水廃寺（豊前国）、大分廃寺（筑前国）などで出土する新羅系古瓦[十八]に原形をもつと考えられ、奈良時代には筑後国で井上廃寺・国分寺、肥前国で晴気廃寺、肥後国で立願寺・国分寺・国分尼寺・宮園遺跡・高橋町古瓦出土地、平安時代になっても筑後国の安楽寺、豊後国の向野廃寺、肥前国の国分寺、肥後国の稲佐廃寺[十九]、さらには薩摩国分寺などから出ている。本資料はその形から平安時代前期のものと思われる。

軒平瓦は二点出ており、一点は国分寺一式である。瓦当面の長さが二十九cmあるもので扁行唐草文の周囲に小粒の珠文がまわっているが、正面から見て右側の空白部がやや広い。あとの一点も長さが二十八cmある扁行唐草文であるが、一式のつるが左へ流れているのに対して、これは右へ流れている。つるも太めで巻きの回数が少ない。硬質で内・外面ともヘラナデで仕上げている。

この三点の出土から考えて、この付近にも寺跡と思われる瓦葺き建物があったらしいことが想定できる。この建物は国府の一部となる建物の可能性が考えられなくはないが、国府想定地と考える場合、東の端に位置することから国府に関連する瓦葺き建物の可能性は

1～3：大隅国分寺跡（国分市），4～6：大隅国分尼寺跡？（国分市），7：薬師堂（菱刈町）

大隅国出土の軒先瓦

考えにくい。ここまで僧寺の延びる可能性はなく、先に記したような理由からして尼寺との関係を考える方がいいのではないかと思う。

六　大隅国のその他の寺院

大隅国では国分寺の他に瓦を出す遺跡は国府や、官衙の想定される姶良町小瀬戸遺跡、あるいは国分寺背後一帯や姶良町宮田岡にある瓦窯などがあるのみである。ただ薩摩国と同じように伝承で古いとされている寺院はいくつかある。例えば七世紀後半の創建といわれている志布志町宝満寺、大崎町飯福寺、高山町薬師寺などである。しかし、これらも薩摩国と同じく今後の調査を待たねばなんともいえない。

なお、菱刈町薬師堂は伝承によると伝教大師（最澄）自作と伝えられる本尊を祭る堂であるが、ここからは十五個の珠文がまわる巴文軒丸瓦と、中心飾に宝珠文のある均正唐草文の軒平瓦が出土している。この瓦には布目が残っているが、いずれもヘラで部分的に消されている。近くには多量の遺物が散布している飯伏遺跡や、県指定文化財の箱崎神宮があり、すぐ近くに古来国境ともなった市山川があることから、あるいはこの地域がこのあたりの中心地であった可能性がある。この年代については軒先瓦に付いている布目が語っている。上原真人氏によると古代の瓦は凸型台一枚作りであっても深く布目が残っているが、中世のものは不明瞭にしか現われないという。(二十) 本県の場合、瓦の出土する遺跡が少ないためそれを具体的に示すことはできないが、西日本各地の例からしてその終末期の状況を示しているものと思われる。

七　まとめにかえて

これまで薩摩・大隅両国の寺院の伝播について記してきたが、両国とも最初に瓦葺き寺院の建てられたのは国分寺で、その時期は八世紀のおわりごろだったようである。白鳳瓦を出す寺院で最も南にあるのは熊本平野の最南端、城南町陳内（じんない）廃寺で、ここは単弁様式、老司式、鴻臚館式などの古式瓦を出している。古墳文化の伝播が熊本・八代平野を飛び越えて有明海から直接川内平野へ来たことを考えるとその伝播の遅れは異常ともいえる。そのことは造瓦あるいは鋳造などの技術的遅れもさることながら来世観の違いということも十分に考えられることではないかと思える。土を盛ってまでして墓を地上につくる新式の墓に対して、南九州の墓はそれまでいつも地下につくる墓であった。奄美以南にニライカナイという海の彼方に理想郷を求める信仰があるが、南九州の来世観というのはどちらかといえばこれに似た海の彼方に、あるいは地下（根の国）に来世の幸せを求める信仰があったのではなかろうか。奄美諸島のニライカナイの思想は南九州に仏教文化がはいって千二百年、キリスト教がはいって五百年もの永い間、それに染まらず生き続けている。永い間続いた信仰が簡単に崩れるはずがない。高塚古墳を否定する社会、それは仏教文化を受け入れる時にも強く作用したはずである。新しい仏教という宗教はこうした来世観をもつ地域にはなかなか溶け込まなかったに違いない。そうした点が経済的な面にプラスして仏教が南九州にはいり込みにくかったひとつの要因であろう。そして国分寺が建てられた後も寺院の建立はなかなか進まなかった。その後も瓦葺きの寺院というのはあまり造られなかったようで、両国ともその数は少なく、長期にわたったということもないようである。これは現在、古代の須恵器窯が両国ともあまり見つかっていないことからして造瓦技術の未熟さとも関連して

いるのかもしれない。熊本あたりでは郡衙と郡寺というような関係もあるようだがそのような寺もこれまではっきりしていない。こうしたことは精神的なことも大きく作用しているのかもしれない。

註

（一）中村明蔵「仏教文化の受容と南九州」『仏教文化の伝来―薩摩国分寺への道―』鹿児島県歴史資料センター黎明館『仏教文化の伝来―薩摩国分寺への道―』一九九〇年

（二）鹿児島県歴史資料センター黎明館『仏教文化の伝来―薩摩国分寺への道―』一九九〇年

（三）小田富士雄「観世音寺と国分寺」『古代の日本』三　角川書店　一九七〇年

（四）小田富士雄「総括」『薩摩国府跡・国分寺跡』鹿児島県教育委員会　一九七五年

（五）澤村仁「遺構について」『薩摩国分寺跡』川内市教育委員会　一九八五年

（六）池畑耕一「薩摩・大隅の国分寺」『古代史を歩く』十二　日向・薩摩　毎日新聞社　一九八八年

（七）註（二）と同じ

（八）建物名については、事実関係の分は報告書に従い、図面説明は筆者の考えによったため違っているものがある。

（九）廣瀬正照『肥後古代の寺院と瓦』廣瀬正照遺稿集刊行会　一九八四年

（十）小田富士雄「筑前安楽寺史―古代末期まで」『九州史学』十二　一九六九年

（十一）小田富士雄「薩摩国分寺跡出土の瓦当資料」『薩摩国分寺跡』川内市教育委員会　一九八五年

（十二）寒川旭「中島ノ下遺跡において認められた地震跡」『中島ノ下遺跡』（『指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書』八）指宿市教育委員会　一九九〇年

（十三）黒板勝美編『続日本紀　後篇』（新訂増補　国史大系）吉川弘文館　一九七七年

（十四）黒板勝美編『扶桑略記・帝王編年記』（新訂増補　国史大系）吉川弘文館　一九三二年　「災害考古学　災害の爪跡から古代が見える」『アサヒグラフ』三五七七号　朝日新聞社　一九九〇年

（十五）布目瓦は、国府域の他に、性格がはっきりしないが、川内市久留巣台地や外川江遺跡でも散布がみられる。

（十六）五味克夫「薩摩郡平礼石寺と守護・地頭・郡司との関係―旧記雑録前編所収山内文書について―」『鹿児島中世史研究会報』三十七　一九七七年

（十七）池畑耕一「西ノ平遺跡と薩摩郡衙（下）」『隼人文化』第十八号　一九八六年

（十八）小田富士雄「豊前における新羅系古瓦とその意義」『塔原廃寺』（『福岡県文化財調査報告書』三十五）福岡県教育委員会　一九六七年

（十九）九州歴史資料館編『九州古瓦図録』柏書房　一九八一年

（二十）上原真人「平瓦製作法の変遷―近世造瓦技術成立の前提」『播磨考古学論叢』今里幾次先生古稀記念論集刊行会　一九九〇年